

保育者養成課程における 音楽実技（ピアノ）指導法

福田 由紀子¹・渡邊 洋子¹

I はじめに

幼稚園および保育所などの幼児教育の現場においては、園児たちが音楽は楽しいと感じる指導を行うことが必須である。そのためには、現場に携わる保育者にある程度の音楽的な力量が必要とされている。幼児教育の現場では、朝の挨拶の歌から始まりお帰りの歌に至るまで、保育者が各教室にあるピアノあるいは電子ピアノを弾きながら指導を行うことが多い。幼児の感性を豊かにし表現力を養ううえで、ピアノという楽器は保育現場において大きな役割を果たしている。それゆえ保育者にとっては、ピアノが弾けることは必須の条件となっている。

平成29年3月に文部科学省が公表した「幼稚園教育要領」^[註1]の「表現」の領域には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と述べられている。また、厚生労働省の「保育所保育指針」^[註2]の「表現」の領域においても同様である。このように、幼児教育の現場においては「表現」するための感覚を身に付けさせることへの期待が大きいのが、これを実践するためには音楽を導入することによって情操教育を展開することが有効な方法の一つであろう。

¹白鷗大学教育学部
責任著者e-mail : spanishbeauty0130@gmail.com

本学の教育学部発達科学科児童教育専攻では、これまで毎年6月に4年生の幼児教育・保育コースの学生を幼稚園実習に送り出してきた。実習を経験してきた学生からは、“ピアノをもっと弾けるようにしておけばよかった”、“園児たちを見ながら弾き歌いができるようにしておけばよかった”などの意見が寄せられている。現場体験を通して、ピアノ演奏に関する技術習得の重要性を認識するに至った結果であろう。

学生は入学前からピアノ演奏技術に差がある。また大学カリキュラム上の制限として、指導を受ける時間にも限界がある。したがって園児に音楽の楽しさを伝えられるような高レベルの保育者を一様に育てることは難しい面を抱えていることも現実である。このような状況の中、より高度なピアノ演奏技術を学生に身に付けさせるために必要な指導法を検討することは、現代の幼児教育研究において特に重要であろう。

本論文は、本学児童教育専攻の幼児教育・保育コースに学ぶ学生（音楽実技の履修者）へ行ったアンケート調査により、ピアノに関する現状を理解したうえで、学生が抱えている具体的な課題を把握することを目的としている。さらにこのアンケートで抽出された課題に対する効果的な指導法を提案するものである。

II 現状分析と問題点

(1) 本学の音楽実技（ピアノ）科目の構成

本学教育学部発達科学科児童教育専攻の小学校教育コースと幼児教育・保育コースの学生は、音楽実技（ピアノ）の授業を4年間履修できるカリキュラム構成となっている。1年次では音楽実技Ⅰ（基礎、小・幼児免許選択必修科目）、2年次では音楽実技Ⅱ（こどものうた弾き語り、小・幼児免許選択必修科目）、3年次では音楽実技ⅢA（応用、選択科目）、4年次では音楽実技ⅢB（応用、選択科目）の科目が設置されている。音楽実技のⅠ・ⅡはML（ミュージックラボラトリー）方式^[註3]による授業、ⅢA・ⅢBはグランドピアノを用いての少人数制による個人レッスン方式の授業

である。各授業とも学生個々の進度に応じた授業を行っている^[註4]。

（２）学生のピアノ演奏の現状

本学に入学する幼児教育・保育コースの学生は、ピアノ技能に関しては未経験者も多く、経験がある場合でも小学校低学年までにやめてしまっている学生が多い。中には本学の受験を決めた時点で習い始める学生もいる。つまり多くの学生は初心者レベル、もしくはそれと同等の段階である。ゆえに使用教材は、１年生はバイエル^[註5]が中心であり、少し進んだ学生にはメヌエットやソナチネなどの小品を併用している。３、４年生は保育現場ですぐに役立つ曲集^[註6]を中心に指導を行っている。

（３）具体的な課題

音楽実技の授業が進んでいく段階で得手、不得手に分かれるため、ピアノを苦手と感じる学生が存在することも事実である。指導に際しては、まず苦手意識を取り除き、ピアノ演奏が楽しくなるように導くことが必要である。そこで学生が苦手意識を持つ最大の要因を探るため、今回、幼児教育・保育コースの１、３、４年生^[註7]の音楽実技科目の履修学生を対象に主として以下の質問内容によるアンケートを行った。

《アンケート》

質問１ 大学入学前にピアノを習ったことがあるか否か。

質問２ ピアノに対して苦手意識があるか否か。あるとすればどのような点か。

また苦手意識を克服するにはどうしたらよいと思うか。

質問３ （３、４年生対象）３、４年間でピアノは上達したか。上達したとすればどのような点か。

これらの質問内容に対するアンケート実施の結果を以下に示す。

質問1 大学入学前にピアノを習っていましたか？

	1年生 (50名)	3年生 (40名)	4年生 (24名)
① はい	29	34	19
② いいえ	21	6	5

質問2 1) あなたはピアノに苦手意識がありますか？

	1年生 (50名)	3年生 (40名)	4年生 (24名)
③ ある	27	25	16
④ ない	23	15	8

- 2) 「ある」と答えた方は具体的にどのような苦手意識を持っているか、またその克服法を教えてください。

◆1年生アンケートの結果

苦手意識はどのような点か	苦手意識の克服法は
<ul style="list-style-type: none"> ・両手で弾くことが難しい ・指が思うように動かない ・リズムが難しい・わからない ・音符が読めない ・へ音記号が読めない ・テンポが一定しない ・鍵盤の場所がわからない 	<ul style="list-style-type: none"> ・練習する (片手ずつの練習・メトロノームを使用しての練習) ・音階を一からやり直す ・指使いを意識する

◆3年生アンケートの結果

苦手意識はどのような点か	苦手意識の克服法は
<ul style="list-style-type: none"> ・リズムをとることが難しい(特に付点) ・読譜が遅い ・両手が大変 ・人前に出ると弾けない ・指使いがわからない ・暗譜が苦手 	<ul style="list-style-type: none"> ・練習をたくさんする (部分練習、毎日の練習) ・手拍子でリズムを打ちながら弾く ・友達に聞いてもらう

◆4年生アンケートの結果

苦手意識はどのような点か	苦手意識の克服法は
<ul style="list-style-type: none"> ・リズムをとることが難しい（付点） ・読譜が遅い ・指使いがわからない ・ペダル踏みがうまくできない ・人前にでるとあがってしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・練習をたくさんする （部分練習・毎日の練習・練習時間を増やす） ・目標をもって練習 ・メトロノームで拍を確認する ・友達に聞いてもらう ・先生が弾く様子を見たり聴いたりする

3) 3、4年生に質問します。3、4年間でピアノは上達したと思いますか？

	3年生	4年生
⑤ はい	38	24
⑥ いいえ	2	0

質問3 具体的に上達した点を教えてください。

3年生	4年生
<ul style="list-style-type: none"> ・弾けるようになった ・歌いながら弾けるようになった 	<ul style="list-style-type: none"> ・初見、読譜力がついた ・ピアノが楽しくなった ・苦手意識が薄れ自信をもって弾けるようになった ・リズムが正確にとれるようになった ・表現に気を付けるようになった

《アンケートから見えてきたもの》

アンケートの結果から、学年の進行によって苦手意識の内容と克服法に変化が見られる。1年生はピアノの経験が浅いため「指が動かない」、「両手で弾けない」、「音符が読めない」、「リズムが難しい」など、ピアノを弾くうえでの初歩的な課題が多いことが特徴である。克服法も「片手ずつの練習」、「メトロノームを使用しての練習」、「指使いを意識する」など基本

的な基礎練習に重きを置いていることが分かる。これに対して、3、4年生になると、多くの学生が「付点リズム」を苦手意識に挙げている。付点リズムが多用される幼児曲を教材としているので、その影響が表れていると考えられる。

3、4年生では「音符が読めない」、「へ音記号が読めない」などを課題とするケースはないが「読譜が遅い」という学生は存在する。また「人前になると弾けない」、「人前になるとあがってしまう」ということも苦手意識として挙げているが、これは上手く演奏しようとする意識の表れであり、それによって生じた課題であると解釈できる。克服法に関する質問では、ほぼ100%の学生が「練習」と回答していることは興味深い。上達するためには日々練習を継続することが必要であることを理解していることが読み取れる。

「ピアノが上達したか」との質問に3、4年生の99%の履修者が上達したと感じている。上達した内容については3年生と4年生には多少の変化が見られる。3年生では「弾けるようになった」、「弾き歌いができるようになった」と保育現場で必要なピアノ技術の上達を挙げているが、4年生ではピアノ技術の上達は勿論のこと「表現に気を付けるようになった」という音楽的な表現について言及している例がある。これは大いに注目すべき点であろう。

Ⅲ 問題解決の実践的指導法

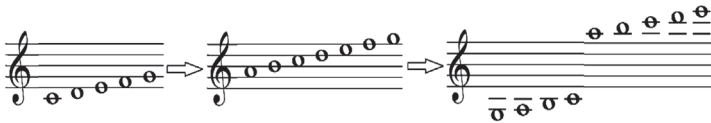
アンケートの結果から、学生の苦手意識は様々な要因が関連していることが分かるが、特に次の事柄が重要であることが覗える。すなわち、(1) 読譜力、(2) 指使い、(3) リズムに関する課題である。ここでは、この3点に焦点を当て、これまで本学における指導法として実践してきたことを踏まえ、より成果を挙げる方法について述べる。

（１）読譜力について

１）音符が読めない学生への指導

文字を徹底して覚えるように、音符も徹底して読む訓練をすることがまず必要である。読譜が苦手な学生は瞬時に楽譜を読むことができない場合が多い。練習法として五線に全音符を書いて一定期間毎日訓練することにより、早く譜読みが出来るようになる。最初は下からソの範囲で譜読みの練習をして、徐々に音域を広げ加線の音符も読めるようにする（譜例１）。読譜力をつけるには、音域を徐々に広げながら練習を繰り返すことにより慣れていくことが効果的である。

（譜例１）



徐々に音域を広げての読譜練習をする

２）譜読みが遅い学生への指導

１）で示した譜読みの訓練をすることは勿論のこと、譜読みが速くなるためには一つ一つの音を見て弾くのではなく音型を「かたまり」として見る訓練をすることがポイントとなる（譜例２）。例えば、譜例２においては、第２小節は第１小節の音型と同形であり、音型ごと高音側に移動していると捉えるのである。同様に、第４小節は第３小節の音型が不変のまま低音側に移動していると視覚的に捉えるのである。飯田^[註8]は「音型に着目し形を視覚的に捉えると初見試奏は確実に出来るようになる」と述べている。このように譜読みの練習法としては、音型を「かたまり」として捉える訓練を行っておくことが重要である。実際のピアノ曲による練習量の増加と共に身に付くことになる。

(譜例 2)

前の小節と
同じ音型で2度上がる

前の小節と
同じ音型で2度下がる

音型に着目して「かたまり」として捉える

Detailed description: The image shows a musical staff in 4/4 time with a treble clef. It contains four measures of music, each starting with a quarter rest followed by a sequence of eighth notes. Arrows point from the first measure to the second, second to third, and third to fourth. The first arrow is labeled '前の小節と 同じ音型で2度上がる' (Same pattern as the previous measure, 2 degrees up). The second and third arrows are unlabeled. The fourth arrow is labeled '前の小節と 同じ音型で2度下がる' (Same pattern as the previous measure, 2 degrees down). Below the staff, the text '音型に着目して「かたまり」として捉える' (Focus on the pattern and treat it as a 'block') is written.

これとは別に、譜読み段階からピアノ演奏時に「暗譜しないと弾けない」、「手元を見ていないと弾けない」と言って譜面を見ずに弾く学生がいるが、このような学生は譜読みが苦手であったり遅い場合が多い。これを改善するためには、ピアノを弾くときに楽譜から目をそらさない習慣をつけることを徹底することが必要である。

3) ト音記号は読めるがヘ音記号は苦手という学生への指導

ト音記号とヘ音記号による音階において、真ん中のドの位置を意識させることが重要である。それより上はト音記号による表現として、それより下はヘ音記号による表現として音階を認識させる（譜例3）。その上でヘ音記号の読譜練習をする。

(譜例 3)

真ん中のド

Detailed description: The image shows a grand staff with a treble clef on the right and a bass clef on the left. A scale of eighth notes is written across both staves. The notes in the treble clef are D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5. The notes in the bass clef are G3, F3, E3, D3, C3, B2, A2. A box highlights the D4 note in the treble clef and the D3 note in the bass clef, with the label '真ん中のド' (Middle D) written above the box.

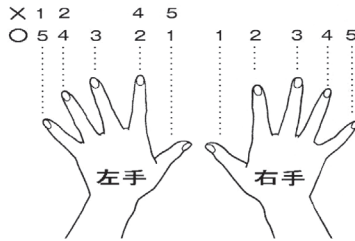
音符を読むのが面倒だという理由でド、レ、ミのフリガナをふり、譜面を読む学生がいる。このようなケースでは、ピアノを弾く際にフリガナを読むことに集中してしまう傾向があるため、演奏されている音を聴くことができない。音楽の楽しさを味わえない結果となることがある。

（２）指使いについて

1) 指番号の指導

最初に右手と左手のそれぞれの指番号を覚えることが重要である。右手は親指が1、人差し指が2、中指が3、薬指が4、小指が5である（図1）。左手において学生がおかしやすい誤りは、小指を1、薬指を2、中指を3、人差し指を4、親指を5と勘違いすることである。これは右手と同様に左から1、2、3、4、5と覚えてしまうことにより生じるミスである。この誤りを無くすため、合掌する時のように両手を合わせ、親指が1、人差し指が2、中指が3、薬指が4、小指が5であると認識させる。

（図1）



バイエル1 (B12) 番^[註9]の譜面において右手の指番号は、ドが1、レが2、ミが3、ファが4、ソが5の指使いが示されている（譜例4）。初心者はその指使いと音との組み合わせが固定的なものであると勘違いするケースがある。この場合、常に右手のドは1の指で弾くものだと思い込み、1以外の指番号で書かれた曲が出てくると混乱することになる。指番号は曲によりその都度変わることを説明することが必要である。

（譜例4）



2) 指を“くぐらせること”と“かぶせること”の指導

音楽実技Ⅰの科目では12回目の授業において、ハ長調の音階の弾き方を学習している（譜例5）。これは、指の返しの“くぐらせる”ことと“かぶせる”ことを理解させることが目的である。右手の上行型では、3の指の下に1の指を“くぐらせる”ことになる。また下行型では1の指の上に3の指を“かぶせる”ことになる。これとは逆に、左手の上行型は1の指の上に3の指を“かぶせる”、下行型では3の指の下に1の指を“くぐらせる”ことになる。

（譜例5）



このテクニックを知らずに指を平行移動させ、フレーズを切ってしまう学生が多いが、フレーズがつながると美しい流れになることが理解できるように指導する必要がある。

幼児教育の現場としての園生活で歌われる「朝のうた」の前奏にも指を“くぐらせる”箇所がある（譜例6）。ミ→ソと音が飛んでいるので、1の指は確実にソの音をめがけて“くぐらせる”ことになる。

（譜例6）

朝のうた

増子とし 作詞
本多鉄磨 作曲

たのしく ♩=100

指番号を無視した演奏を行うと弾く度に指使いが変わることになるため、結果的に弾きにくさが生じ、フレーズが繋がらないことになる。楽譜に書かれている指使いに沿って練習することを継続するうちに、次第に慣れて感覚が身に付くようになる。

（3）リズムについて

1) 音価についての指導

ここでは、バイエル教本の中から特に間違えやすいリズム例としてバイエル31_(B56)番、バイエル38_(B64)番、バイエル60_(B86)番を挙げ指導法を述べる。

最初に、バイエル31_(B56)番の最後の2小節に注目してみよう（譜例7）。この曲は4分の3拍子であるにも関わらず、この2小節を8分の3拍子で弾いてしまう学生が多い。リズムを無視して音のみを弾いてしまう結果である。

（譜例7）

The image shows the musical score for exercise 31 (B56) in 3/4 time. The score is in treble and bass clefs. The tempo is marked 'Allegretto' and the dynamics are 'f'. The final two measures of the exercise are highlighted with a box. Below the score, there is a diagram showing the correct 3/4 time signature and a common mistake where the final two measures are played in 3/8 time. An arrow points from the text to this diagram.

多くの学生がこのような誤ったリズムで弾いてしまう。

この場合の改善策としては、まず8分音符2つで4分音符1つの長さであることを理解させる。次に最小単位の8分音符を1拍にして「1と2と3」と声を出して数えさせるのである。これにより誤った演奏は激減する（図2）。

(図2)

♩ = ♪♪ の理解
 1と2と3と
 声に出して数える

バイエル38_(B64)番も同様な誤りをおかしやすい。この場合は声を出して数えさせることにより誤りを防ぐことが出来る(譜例8)。

(譜例8)

連弾 生徒パート
 Comodo
 38
 (B64)
 dolce
 legato
 1と2と3と 1と2と3と 1と2と3と 1と2と3と 1と2と3と
 f
 1

次にバイエル60_(B86)番を挙げる(譜例9)。この曲は全音符から始めて曲の進行と共にリズムが細分化され、16分音符を頂点としてまた全音符へと戻る構造を持っている。

(譜例9)

連弾 生徒パート
 Moderato
 60
 (B86)
 legato
 3連符
 16分音符
 3連符
 3連符 ⇌ 8分音符
 staccato
 f
 8分音符 ⇨
 16分音符 ⇨

多くの学生に見られる誤りは、第10小節から第11小節に移るときに正確な3連符のリズムが取れないことである（図3）。第14小節の16分音符から第15小節の3連符に戻る時も同様である。

（図3）



さらに第16小節の3連符から第17小節の8分音符に戻る時もリズムが崩れる。改善策としては、最初は鍵盤には手を触れさせずに、手で4分音符のリズムを打たせながら8分音符、3連符、16分音符に当てはめた言葉を声に出させる（図4）。当てはまる言葉なら何でも良いが、図4の譜例では馴染みのある動物を当てはめてみた。これができるようになったら鍵盤で弾かせる。これにより、1～3週間程度でそれぞれの音符の長さを理解して正確なリズム取りができるようになる。

（図4）

2) 付点のリズムの指導

福井^{〔註10〕}は「幼児の歌110曲集〔改訂版〕に収められている110曲のうち、半数近くに付点リズムが含まれている」と述べている。このように保育現場で使用される幼児曲には付点リズムが多いが、その理由は付点を使うことで、よりリズムカルな曲想となり、園児たちが歌いやすく身体全体でリズムを捉えやすいからであると思われる。ジュリアード音楽院のピアノ名

教師であったジョセフ・レヴィーン^[註11]は、著書で「リズムを教えるのは大変困難な仕事だ。リズムは体で感じとらなければならない」と述べている。

「あさのうた」「おはようのうた」「おべんとう」「おかえりのうた」「さよならのうた」など、園生活のうたとして歌われる曲は全て付点リズムが使われている。しかし、現状では学生たちはリズムを間違っ

て演奏することが多い。ここでは園生活のうたから特に間違っ

て演奏されやすい「おべんとう」

(譜例10)

おべんとう

天野 蝶 作詞
一宮道子 作曲

♩=120

5 1 2 5 5 1 1

5 1 2 5 5 1 3

5 1 2 5 5 1 3

5 1 2 5 5 1 3

1.2. おべんとう おべんとう うれしいな

5 5 1 2 1 2

おんててもきたれいにしよ なりましんで





5 5 1 2 1 2

みんなな そろつてら あいさつ

5 5 1 2 1 2

この曲の問題点は1小節内が付点のリズムと8分音符の組み合わせで書かれていることにある。1小節内が付点リズムのみ、8分音符のみで書かれていれば問題ないのであるが、付点リズムと8分音符の組み合わせが混乱を生じさせる。誤って演奏する学生のほとんどは全てを付点リズムだけで弾こうとする（図5）。これは16分音符と8分音符の違いが認識できていないために生じる問題である。

（図5）

正しいリズム ○	× 学生が 間違っ て弾くリズム
 <p>タッカ タンタン</p>	 <p>タッカ タッカ</p>
 <p>おべんと おべんと</p>	 <p>おべんと おべんと</p>

この改善策としては、リズムを「タッカタンタン」と言わせながら、手でリズム打ちをさせる。「タッカ」のリズムの付点8分音符は拍の重さを意識させ、16分音符は軽さを意識させる。そうすることにより身体全体でリズムを捉えるようになる。これらの指導を根気よく繰り返すことにより、数回から数週間でこのリズムを正しく理解することができるようになり正確な演奏が可能になる。

「おかえりのうた」の前奏部分（譜例11）も間違いやすい付点リズムである。

第1小節3、4拍目のリズムは付点リズムで書かれているにもかかわらず、複付点リズムで弾いてしまうことが多い（図6）。左手2つ目の4分音符を弾いた後、どのタイミングで右手を打鍵するのかがわからないのである。“弾む”という感覚のみで不正確に弾いてしまう結果、複付点リズムになる問題がおこる。

(譜例11)

おかえりのうた

天野 蝶 作詞
一宮道子 作曲

たのしく ♩=116
gva-

1. きょうも たのしく すぎました
2. おりがみつ きも かたづけて

(図6) ↑
付点リズム 複付点リズム

同様のリズムの誤りは「さよならのうた」の後奏部分の第22、25、26小節の1、2拍目にも見られる（譜例12）。

(譜例12)

さよならのうた

高 すすむ 作詞
渡辺 茂 作曲

改善策としては、ピアノを弾く前に声を出してリズムを捉えさせることである（図7）。付点リズムは、「ターンタ」の“ん”を意識させ、複付点リズムは、「ターうんタタン」の“うん”を意識させる。共に拍の頭に音は無いが、どちらも延ばされている拍を感じるによりリズムの違いが分か

るようになる。

(図7)

	付点リズム	複付点リズム	
			
付点リズムは 延ばされている(ん)を感じる			複付点リズムは 延ばされている(ん)を感じる

IV 結び

本論文では、保育者養成課程で学ぶ学生が抱えている苦手意識の原因はどこにあるのかを探るため、在学生に対してアンケート調査を行った。その結果、学生が抱える問題点として、(1) 譜読み、(2) 指使い、(3) リズムの3点が抽出され、これらの問題を解決するための具体的な方法を提示した。

今回のアンケートで興味深かったことは、学年によって苦手意識や克服法に変化が見られたことである。4年間で上達した内容に関する質問については、「ピアノが楽しくなった」、「苦手意識が薄れ自信をもって弾けるようになった」、「表現に気を付けるようになった」などの回答があった。このことは単なる演奏技術の獲得のみならず、曲のもつ音楽性とその表現への意識が芽生えていることを示している。また、3、4年生への質問項目に対する回答結果にも示されているように、ほぼ100%に近い学生が上達したという実感をもっていることが確認できたことは極めて意義深いものである。本コースで行っている音楽実技のカリキュラム構成とその指導法が一定の成果をあげている結果であると考えることが可能であろう。しかし一方では、一部の学生においては「読譜が遅い」、「人前に出ると弾けない」などをはじめとした様々な課題が残されていることも事実である。学生がより強い意欲をもって練習に取り組める指導法の研究を重ねていくことを今後の課題としたい。

[註]

- [註1] 文部科学省幼稚園教育要領（平成29年3月）
- [註2] 厚生労働省保育所保育指針（平成29年3月）
- [註3] ミュージックラボラトリー・システムは、指導者用楽器（親機）と学生用楽器（子機）をケーブルで接続することにより、大人数での鍵盤学習を効率的に行うシステムである。本学には学生用楽器は48台設置してある。90分授業のうち冒頭20分を説明・解説に当て、残り70分を2人の教員で指導している。
- [註4] 2019年度当初の資料『音楽関係科目担当者からのお願い』の中の音楽実技（ピアノ）の履修方法に記載。
- [註5] 荒井弘高監修『Let's play the BEYER』圭文社 2017（第5刷）
- [註6] 白鷗大学音楽研究室編著『子供のうた弾き語り曲』圭文社 2018
- [註7] 筆者は大学2年の弾き歌いの授業は担当していない。
- [註8] 飯田は譜読みには「点読み」と「形読み」があると述べている。音符の音名を即座に読める能力を培う方法を「点読み」、音型に着目しメロディーの上下行の形を視覚的に捉える方法を「形読み」と定義付けている。
- [註9] バイエル番号についている（ ）内の小さな数字はバイエル原典番号である。
- [註10] 福井真裕子「付点リズム」の指導法に関する一考察 —保育士養成課程でのピアノ初級者への試みから— 京都聖母女学院短期大学紀要 第41号、2012
- [註11] ジョセフ・レヴィーン著『ピアノ奏法の基礎』中村菊子訳 全音楽譜出版社 2004（第31刷）

引用文献

- ・文部科学省幼稚園教育要領（平成29年3月） 17ページ
- ・厚生労働省保育所保育指針（平成29年3月） 31ページ
- ・2019年度当初の資料『音楽関係科目担当者からのお願い』から「音楽実技（ピアノ）の履修方法」抜粋
- ・飯田和子著「特集 表現するための〔譜読み〕」『ムジカノーヴァ』2002、11月号、62～66ページ 引用文64ページ
- ・福井真裕子「付点リズム」の指導法に関する一考察 —保育士養成課程でのピアノ初級者への試みから— 京都聖母女学院短期大学紀要 第41号、2012、75ページ
- ・ジョセフ・レヴィーン著『ピアノ奏法の基礎』中村菊子訳 全音楽譜出版社 9ページ 2004（第31刷）

参考文献

- ・黒田紀子「保育者養成校におけるピアノ指導」—音楽表現力の基礎を育成するための効率的ピアノ指導法— 研究紀要（小池学園）16号 2018
- ・金井玲子「保育者養成課程におけるピアノ指導」—こどもの表現活動を活性化させるピアノの活用とその指導法— 浦和論叢58号 2018
- ・黒河好子著『絶対！進化するピアノレッスン100のコツ』株式会社ヤマハミュージックメディア 2015（第3版）

- ・角 聖子著『努力よりコツ！ピアノがうまくなるにはワケがある』音楽之友社 2012
- ・山岸麗子著『あたまで弾くピアノ 心を表現する手段』音楽之友社 2000（第13刷）

使用楽譜

- ・荒井弘高監修『Let's play the BEYER』圭文社 2017(第5刷) 10ページ、14ページ、19ページ、33ページ、39ページ、61ページ
- ・白鷗大学音楽研究室編著『子供のうた弾き語り曲』圭文社 2018 47ページ、50ページ、51ページ、53ページ

